

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開(シ04)

目的 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待される。

- 成果**
1. 漆器類に関わる研究
 - ・5月10・11日に大分県津久見市、県立歴史博物館、大分市歴史資料館所蔵南蛮漆器の調査及び意見交換を実施した。
 - ・南蛮文化館と共同研究の覚書を取り交わし、所蔵漆器類の調査研究を行うとともに、同館所蔵品の修復について指導助言を行った。
 - ・5月19日、東慶寺蔵南蛮漆器聖餅箱を東京国立博物館撮影CT画像による樹種及び年輪年代の検討作業を実施した。
 - ・3月4・5日に当研究所にて公開研究会「南蛮漆器の多源性を探る」を開催した。発表者は国内9名・海外2名の合計11名であった。江戸時代初期を中心とした南蛮漆器の持つ多源的性格の検討、桃山時代ポルトガル人による工芸関連史料検討、同時代の琉球漆工史、南蛮漆器の炭素年代測定結果、南蛮漆器使用漆の有機化学分析結果、東アジア産南蛮漆器漆のストロンチウム同位体分析、南蛮漆器使用木材の樹種同定、螺鈿に使われた貝種分析、桃山時代の「鮫皮」利用史、装飾金具編年の検討、南蛮漆器類似のポルトガル・アジア様式調度の歴史と素材・技術分析などで、人文学から自然科学までの多岐にわたる未知の分析結果多数が報告・討議され、登壇者以外に海外からの渡航参加者13名、国内参加者約90名弱を得た。
 2. 研究成果公開
 - ・当研究所が所蔵するガラス乾板のデジタルデータ化に、文字情報を補訂の上、ウェブへのアップロード作業を継続的に実施した。
 - ・6月11日の宝石学会、同月26日の文化財保存修復学会で、真珠科学研究所との共同研究の中間報告を口頭発表した。
 - ・2月24日部内研究会にて甲賀市水口藤栄神社蔵十字形洋剣の調査研究結果について共同研究者5名による成果発表を行った。

報告・矢崎純子、小林公治ほか：「螺鈿に使われる貝殻の分析—主にヤコウガイ、アワビについて」『平成28年度宝石学会(日本)講演会・総会プログラム』p.19 16.6

・矢崎純子、小林公治ほか：「螺鈿に使われる貝殻の構造的特徴—ヤコウガイ、アワビについて」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.54-55 16.6

発表・小林公治：「慶長期後半から寛永期前半にかけて流行した漆器文様・技法—絵画資料と伝世漆器との対話—」文化財情報資料部研究会 16.10.25 ほかに18件

・小林公治：「藤栄神社に伝わる十字形洋剣(レイピア)の实在性と年代の検討—博物館コレクション・出土資料・絵画資料による予察—」文化財情報資料部研究会 17.2.24 ほかに18件

刊行物・『公開研究会予稿集 南蛮漆器の多源性を探る』17.3

研究組織 ○小林公治、佐野千絵、小林達朗、二神葉子、塩谷純、津田徹英、皿井舞、安永拓世、橘川英規、田所泰(以上、文化財情報資料部)、江村知子(文化遺産国際協力センター)、中野照男、田中淳(以上、客員研究員)